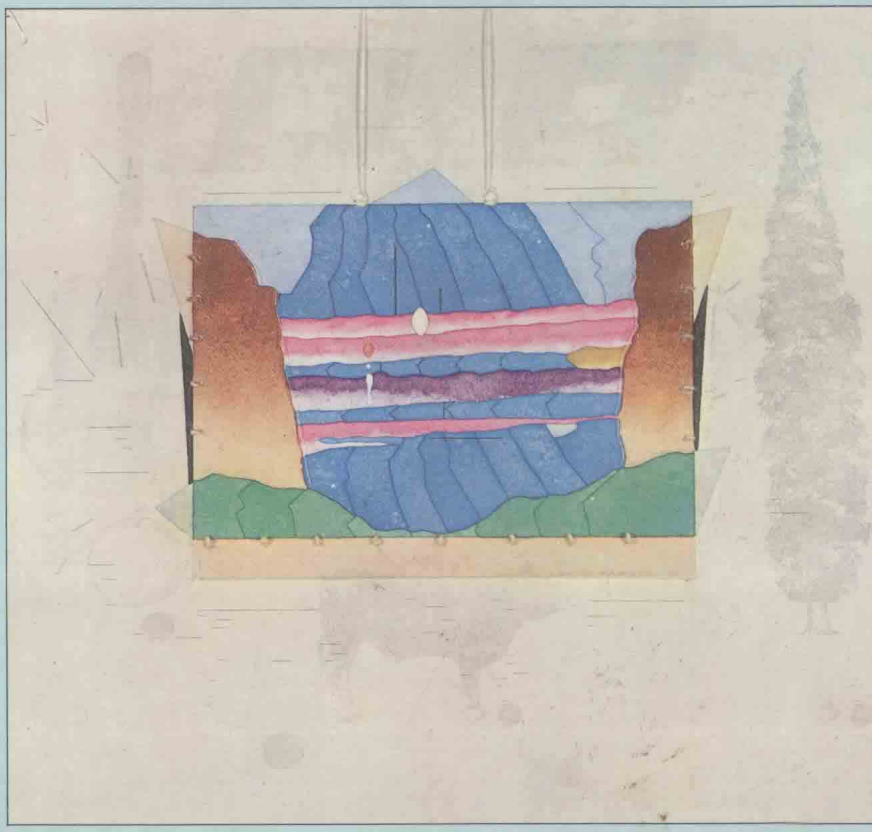
ベティさんの庭

山本道子



ベティさんの庭

山本道子

ベティさんの庭（にわ）

定価八五〇円

発　行　昭和四十八年二月十五日
十五刷　昭和五十二年七月三十日
著　者　山本道子（やまもとみちこ）
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
〒162 東京都新宿区矢来町七一　振替東京四-八〇八
電話業務部03(266)五一一一　編集部03(266)五四一一
印刷所　株式会社金羊社
製本所　新宿加藤製本株式会社

© Michiko Yamamoto, 1973, Printed in Japan
乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

魔法 5
雨の椅子 51
老人の鴨 101
ベティさんの庭 119
わがままな幽霊 191
あとがき 242

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ベティさんの庭　山本道子第一創作集

装画　山村昌明

魔

法

一

白い天井の中央についているプロペラみたいな大きな羽が静止していた。

三枚の羽はそれぞれが、わずかに捩じられたかたちをしていて、先端から中心に向かって、油埃がしだいに薄くなっているのがわかった。

頭上でいつも休みなく廻っているはずのものが、埃まみれで見窄(みすぼら)しく、気の抜けたようにじっとしているのが、いかにも余計ものに見えた。

やっと涼しい季節がやってきた。朝子は、動かない天井の扇風機を見てそう思った。あと二ヵ月ぐらいは冷房もいらない。

六月になって乾いた季節がはじまると、木枯もさかんに吹いた。熱帯の強烈な太陽の機嫌を損ねることもなく、その気まぐれな闖入者は午前中いっぱい、ときには一日中、軽快に吹き荒れて、海の向うへ走り去っていく。

芝生には水が欠かせなくなったし、急に落葉も多くなった。ハイビスカスの生垣にも、いくらか花がすくなくなった。ブーゲンヴィリアも、フレンジ・ベニーもすくなくなった。そのかわり

背の高いポインセチアは、空に向かっていくつもの真赤な花が燃えるように咲いている。
冷たい風が吹きさえしなければ、植物が枯れさえしなければ、陽射しがいくらか和らぐだけで、この地方の風俗にも生活にも一年中、これといった変化はない。
一昨年も去年もそうだったが、この頃になると、朝子は季節感というものを、どうにかとりもどすことが出来た。
ブラインド式のガラス窓を閉めきって風を遮ぎると、室内はひんやりして、いやに静かだった。裏庭に面したベランダへ通ずるドアを開けると、大きな風が気忙しく走り抜けるのがわかった。すぐ眼の前のマンゴーの、思いっきり繁茂した巨木が、ちいさな花の群をつけて、ところどころに紅葉を見せながら光っていた。陽が眩しすぎた。
朝子は、熱い番茶をモーニングティー用の大きな茶碗に淹れて、ベランダのテーブルに置いた。それから居間に戻ると、ソファの上に脱ぎすててあったカーディガンをとって、ベランダの椅子に放り投げた。そして、材料を日本からわざわざとり寄せて作ったスリッパで、ぱたぱた音をたてて室内を歩きまわり、クールをどこへ置きわすれたか捜した。
スリッパの底はフェルトで、爪先の部分はストロヤーンの複雑な模様編で、その縁を手のこんだ刺繍で飾ってあった。
朝子は、ここへ来てすぐの頃、さまざまな配色で七足のスリッパを作りあげた。七足を作るのにさほど日数はかからなかった。彼女は、何事も一気呵成に仕上げずにいられない自分の性分を、つくづく悪癖だとこのときも思った。冷房のとりつけてある寝室で、息もつかずにこの作業にはげんだ。そして七足目の最後の片方にかかったときには、もう精根つき果てて、首筋と背中がみしみし痛み、眼が疲れきって、窓外の太陽に殺されそうな気配さえ覚えた。そこで一ダースの予

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

定を七足で打ち切りにした。だから朝子の勝手な理由によれば、客は五人までであった。二足は自分たち夫婦のものだから、客をする場合は五人以下でなければならなかった。いずれ残りの分を、気のむいたときに仕上げようという気はまるでなかった。するだけしてしまうと、憑ものがおちたように興味をなくした。だから、熱中するということは、朝子の場合はやはり悪癖かもしれなかった。

来客があると、ドアの前にスリッパを並べて、強引に靴を脱がせ、大きな足を華奢なスリッパに入れさせた。男の客たちは、爪先でそれをなんとか突っかけて、戸惑った莫迦笑いを顔に浮べて、自分たちを突飛な目に遭わせている日本の女を、あらためて見返した。女客のほとんどは、大袈裟に感嘆の声をあげて、しばらくは足もとに話題が集中した。昼間やって来るごく親しい女友だちとか、化粧品やプラスティック食器のセールスの職業婦人たちは、埃と汗で汚れた足で、こんな美しいものを履くわけにはいかない、と遠慮して素足で上って来ることもあった。もっとも、この国の人間が都会でも田舎でも、屋外や室内を素足で歩くことを好むのは、見馴れてくるとよい習慣に思えた。とくに若い娘たちが、歩道を海岸ととり違えているような跣で、足早に通り過ぎるのは、朝子の好みにぴったりだった。

ベランダに置いてあるテーブルは、六個一組の小テーブルのひとつで、本来は全部を寄せると、やや大きい円テーブルになる仕掛けだった。小テーブルは三脚だから、円テーブルひとつに寄せ集めると、十八の脚になって、テーブルとしては莫迦げていた。これは朝子の好みに合わないものであった。ちょうど円いケーキを六人分に切り分けたときのように、ひとりひとりの膝もとへ、茶菓や灰皿をのせて移動させることが出来た。しかし中央にあるべきものを、ばらばらに分割してサイドテーブルに移した場合、そのあとがいやに間が抜けて見えるし、とにかく形といい三脚

の不安定さといい、朝子はつかうたびにいつも落着かない気分にさせられた。こんなテーブルを造ったり、買ったりする人間の気が知れなかった。朝子はこの家つきの十八脚のテーブルをばらばらにして、どれも目立たない隅へ追いやった。

ベランダには他に、チョコレート色のペンキが剝げかかった古惚けた籐椅子が置いてあった。それはいかにも熱帯風で、南方物語りを舞台にかける場合には、欠かせないであろう芝居の大道具のようであった。

朝子はその椅子に腰かけて、カーディガンを羽織り、両膝を抱えこんで、クールに火を点けた。そして思わずマッチの燃えのこりを投げ捨てたところは、灰皿ではなく熱い茶碗の中であった。マッチはじゅと音をたてた。朝子は茶碗の中をのぞきこんだ。それから、とにかく茶を淹れかえようと中味を捨てた。しかし階下の熱帯植物のあるちいさな植込みに落下したのは、中味だけではなかった。街のウールワースで七十五セントで買った茶碗は、植込みに投げこんである大小の石にぶつかって、破片になって散らばっていた。どうして茶碗ごと捨ててしまったのか、朝子は、しばらくぼんやりして手摺から身をのり出していた。

この土地の家屋は、たいてい橋桁風の二階家だった。一階は吹き抜けで、ガレージや物置や洗濯場になっていて、住まいは二階なので、庭の樹木は下から見上げるより、眼の高さに繁茂した葉末を見ることの方が多く、庭全体のみどりの濃淡もよくわかった。

ベランダから身をのり出したまま、朝子は隣家へ眼をやった。丈の高いユーカリの樹が、白いペンキを斑に吹きつけられたような幹を見せて立っていた。隣家は昨日とまるで違った表情で静まりかえっていた。窓も入口の扉もすっかり閉ざされていた。朽ち葉の垂れ下った数本のバナナの向うに、隣家のプールは、明るいブルータイルが陽をうけていた。プールに水もないし、ビー

チパラソルも片付けられて見えなかった。二頭のグレーハウンドもいなかった。ケンプ夫人のピアノもきこえなかった。

ケンプ夫妻と犬たちは、キャンベラへ着いたはずであった。最北のD市がこの陽気では、キャンベラは寒いことだろう。朝子は椅子に戻って、背をまるくして膝を抱えこんだ。

朝子が夫や子供と南を一周したのは、去年の三月だった。キャンベラの人工的で公園じみた政治都市は、一日観て廻っただけで、たちまち退屈した。活気に満ちた人間の生活はどこにもなかった。ショッピング・センターも人の姿がまばらで、街の中心部の小公園は、新しいばかりのよそよそしさで、暑い陽盛りの甃石に、ハトが遊んでいた。また、街のいたるところにアカシアが黄金に咲き乱れていた。それはしかし、あまりにも整然とした人工都市の美しさというよりも、花までもとり澄ました不自然なたたずまいであった。

ケンプ夫人は、自分たちはパースへ帰りたかった、と朝子に云った。しかし、引越す先はどこであれ、この熱帯の田舎を去ることだけで浮きうきしていた。

「アサコ、あなたがたも、すぐ東京へ帰れるでしょう。東京へ、日本へ」

彼女は、勝手に朝子の表情に羨望を読みとって元気づけるように云った。

ケンプ夫人が巨体を揺すって階段を下りて行くのを見守りながら、朝子は躊躇ったのち呼びとめた。

「ショーンは、もう一度ここへ帰って来ますか」

ケンプ夫人の足は、大きなロボットのようにぎこちなく階段の中途にとまり、ひと息入れて振り返った。それから手摺に重い躰をもたせ掛けるようにして、すこしの間言葉を捜すような素振りで、斜め下の庭の一角に眼をやった。それから急にとってつけたように陽気に云った。

「そうそう、ショーンのことを忘れてたわ。あの子はどうしても一度ここへ帰って来たいらしいの、その必要はないってわたしは電話で云ったんですけど。大学が休暇になったら、ブリスベーンからキャンベラへ帰ればいいのに。とにかく彼の車は置いて行きます。ショーンが自分でキャンベラまで運ぶらしいから」

そして夫人の眼は、まともに朝子を見据えて云った。

「アサコ、あなたのところへショーンから手紙が来ますか」

朝子は首を横に振った。

「さようなら、アサコ」

夫人はだしぬけに、五本の指をひらひら動かして云うと、くるりと背中をむけて階段を下りはじめた。

その後朝子は彼女に会わなかった。隣家は毎日慌しく引越しの準備をしていたが、朝子は、今朝になってその不在を知ったのだった。それは突然といえないこともなかった。あれから十日ぐらいあったのだから、一度や二度はケンプ夫人と垣越しに話をすることも出来たはずであった。ショーンがいれば、深夜でも空港へ見送りに行ったかも知れなかった。

「ショーンはあなたがたを知って、人生を決めたようなものだわ。あの子が大学で専門に日本語を勉強するって決めたのは、あなたたちのおかげですよ。それまでのショーンはわたしの日本贔屓に関心をもたなかったのに、はじめて知りあいになれた日本女性に動かされたのよ」

「ショーンが、はじめて親しくなった日本女性は百合だわ」

朝子は笑った。ケンプ夫人も笑いながら、プールの中でショーンにしがみついて騒いでいるちいさな百合を見やった。

その日も、夫人の午後のお茶に招かれて、朝子はプールサイドの陽陰で夫人の相手をしていた。夫人が肩をすくめて笑うと、よく動く灰色の瞳はたるんだ瞼のおくで片隅に寄って、陽気な魔法使いのようであった。

ショーンがプールから這いあがると、彼の裸体で水滴が光って散った。彼はバナナケーキを一切れ口に放りこんだ。あとからビキニ水着の百合が走って来て、朝子の膝にからみつくと、母親にだけわかる日本語で云った。

「百合ねえ、潜ったのよ」

「本当かしら、潜ればすぐ浮くようになるわ」

ショーンが母子の会話を知りたそうに首を傾げて、朝子と百合を交互に見た。

「あなたはいい先生ね、ショーン。ユリは潜れるって自慢してるのよ」

ショーンは若者らしく、口をいっぱいに開けて笑った。

「さっきの騒ぎ見てなかったの、頭をこうもって、ちょっと顔を水につけただけで、ユリは泣き叫ぶんだ。こっちの方が怕くなってやめたんだよ、気の弱い先生だね、ぼくは」

「四歳じゃまだ水が怖ろしいのよ、そのぐらいの方がいいのよ、この辺の子供たちは、もうカエルみたいだけど」

夫人は肉のたるんだ太い腕を宙に泳がせて肩をすくめた。

金髪の青年と、ちいさな百合は並んで草の上に腰をおろして、冷えたレモネードを飲んだ。

ケンプ夫人はパルプをあつかっているケンプ氏の仕事の関係で、二度日本の観光旅行を経験していた。そのことが彼女の最大の自慢であり、ドラマでもあった。

「日本のようにすばらしい国はないですよ。いい？　ショーン、レストランやティールームに入

ると、可愛い娘さんがすぐ水の入ったコップを持って来るの。タクシーは自動扉だし、アサクサはちいさな商店が蜂の巣みたいにぎっしり並んでるのよ」

朝子は苦笑した。大袈裟な夫人の表現は、いつも同じことの繰り返しで、冗談だか本気だかわからなかった。アサクサが蜂の巣なら、サクラは空に流したストロベリーミルクで、寺は沈黙のストーリーであった。そして彼女が日本を誉めそやすお返しを、朝子はいつも省略するわけにいかなかった。夫人は喋るだけ喋ると、オレンジ色の口紅で塗りつぶした唇をひき結んで、首を心もち傾けて、朝子の言葉を促すようにじっと見据えるのだった。そんなとき、朝子はいつも夫人の口のまわりの皺を見ながら、途方もない暑さを覚えた。夫人のよく動く唇がぴったり閉ざされると、皺は待ちかまえていたように現われた。

その毎回同じ会話の繰り返しと、同じ表情との対面で、朝子はとくに暑さの酷い午後など、いってみれば夫人の口元でめざましく生きている皺に脅迫されているような気分になった。そして慌てて、夫人の国への賛辞を並べたてた。例えば、広びろとした大自然、夜空の美しさ、健康でのびのびした人柄の良さなど、思いつくことをなんでも並べた。

あるとき、朝子は自然の花ばなの美しさをあげた。すると、それまで大きく頷きながら満足そうに朝子の言葉に耳をすましていた夫人は、灰色の瞳を忙しく動かして、考えこむ素振りを見せた。そしておもむろに、そうでしょうか、と反問した。朝子は慌てて、色彩の濃い自然の花は美しいと強調した。いいえ、それはすこし違います、と夫人は首を振った。自分は日本の花の美しさを見てから、この土地に咲く強烈な色彩の花には、はかない美しさという美の主題が欠けていることに気がついた、とのべて、朝子を驚かせたことがあった。朝子はそして自分のおざなりの会話を恥じた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com